書評

嵩満也編『変貌と伝統の現代インド―アンベードカルと再定義されるダルマ』

法蔵館、2018年３月、286頁、2500円＋税、ISBN 978-4-8318-6371-3

根本達『ポスト・アンベードカルの民族誌―現代インドの仏教徒と不可触民解放運動』

法蔵館、2018年２月、359頁、5000円＋税、ISBN 978-4-8318-5704-0

志賀美和子

近年ダリト研究分野では人類学を中心に研究の蓄積が著しいが、ここに新たに２点の成果が加わった。評者は歴史学を専門としこれらを評論するには適任ではないが、それでも現代インドで展開される所謂ダリト運動の多面的・複層的実態と文脈を理解するに際し同２作が重要な視座を提供していることを感知できた。力不足ながら評を試みたい。

嵩満也氏の編著は、龍谷大学国際社会文化研究所による研究プロジェクト「現代インド変貌の諸相―マイノリティとマージナリティの視点から」（2013-14年度）の成果である。Ⅰ部「現代インド変貌の諸相」は「下層民」の台頭に注視し、この現象に影響を与えたアンベードカルの思想および地域社会での受容実態を検討する。嵩満也「アンベードカルにおけるカースト絶滅の道とブッダのダンマ」は、『カーストの絶滅』と「ブッダとその宗教の将来」を用い、アンベードカルの不可触民制廃止運動がヒンドゥー教の枠内での改革から改宗へと至る過程を整理する。更に彼の仏教理解を、ヒンドゥー教の規則としてのダルマと仏教の道徳としてのダンマの対置に注視しつつ解明している。ゴウリ・ヴィシュワナータン「宗教、民主主義に対するアンベードカルの見解」は、アンベードカルが、絶対性を否定し個々人の合理的選択を可能にする点を仏教の特質とし民主主義との親和性を見出していたことを指摘した。ガンシャム・シャー「インドの仏教とダリト解放運動」は、ヒンドゥー至上主義が強いグジャラート州において仏教がダリト解放に果たしてきた役割について、主にその負の側面を浮き彫りにする。同州では仏教改宗者の多くが都市在住の経済的中流層で、いまなお続くダリト差別の原因を、都市に移住せずかつヒンドゥーのままのダリトが存在することに還元しているという指摘は、差別からの解放と改宗との関係の複雑さと矛盾を

表していると言えよう。舟橋健太「仏教とともに生きて―現代ウッタル・プラデーシュ州における仏教運動と仏教実践」は、フィールド調査に基づき、仏教徒たちがアンベードカルの仏教思想を継承しながらも、日常生活においては地域社会の承認を得るためにヒンドゥー教と仏教の儀礼を選択的あるいは混交的に実施している様を解明し、改宗が日常生活にもたらす結果には断絶ではなく連続の側面があると主張する。断絶を強調する研究では混交的宗教実践は「不完全な改宗」と解釈されるが、「改宗」とは理念上は以前の宗教のあらゆる要素の放棄を求めるものの、その「排他性」の達成度は状況に応じて幅があり、仏教改宗運動のリーダーが唱える理念とそのフォロワーの日常実践の間にも相違があるという指摘は、各地のダリト運動を理解する上で極めて重要である。中根智子「インドにおける子どもの権利・貧困・エンパワーメント」は、コルカタ市の貧困層の子どものエンパワーメントに取り組む2団体の活動を分析し、「保護の客体」ではなく「権利の主体」として子どもを認識した上で子どもの権利の実現を目指す「人権アプローチ」の有効性を考察している。

Ⅱ部「現代に生きるインドの伝統思想　ダルマと幸福を再定義する」は、ダルマ概念の系譜と現代への継承を論じる。パトリック・オリヴェル「古典期バラモン教におけるダルマの定義とその正当性の認識根拠」は、ダルマの正当性の認識根拠を唯一ヴェーダとする教理学的議論を紹介した上で、歴史的現実として、ダルマの記録は地域や共同体の「人々が合意した規範的慣例の記録」であるという見解を提示する。若原雄昭「ダルマの相続者」は、仏陀が回答を拒否したとされる十の問いの一つである宇宙の起源が『起源経』では饒舌に語られていることを検討する。アンベードカルが『仏陀とそのダンマ』で『起源経』に言及しながらその宇宙論的記述を黙殺した理由は、「宗教の目的は世界の起源を説明することである。ダンマの目的は世界を再構築することである」と認識していたためだという。彼の「宗教」観および仏教／ダンマ理解の特徴に関する仏教学からの重要な提言といえよう。ヴェルナー・メンスキー「翻訳において失われたもの―植民地時代のヒンドゥー法の一元的処理」は、ヒンドゥー法の祖型はヴェーダに存在し、そこでは秩序や幸福に関わる概念としてリタやサティヤが有力であったが次第にダルマが有力になったと指摘した上で、ダルマが多義で多元的な「生きた法」であった

にもかかわらず、植民地時代の法の実体化作業においてその多元的側面が失われたと主張する。桂紹隆「普遍的法則としてのダルマ」はまず、初期仏教研究者ゲシンが「ダンマ／ダルマ」の含意を6分類しながらその一つである「自然の法則、秩序」については文献的根拠がないとして排除していることを紹介した上で、それへの反論を試みる。ブッダの教えはこの世の全ての現象は因果律であるとするため、仏教では因果関係を確立するための帰納法的思考法が発達し、これが「科学的に目覚めた社会が受容しうる唯一の宗教」としてアンベードカルが仏教を選択した根拠であるとする。田辺明生「幸福探究（ウェルビーイング）の支えとしてのダルマ」は、制度化され固定化された「宗教」と「宗教的なるもの」を区別し、ダルマにはバラモンと法典類を中心とする「宗教」による秩序構築の側面と、その構造を批評し再定義しようとする「宗教的なるもの」による脱構築の側面があるとする。その上で、思想の自由を求める世俗的合理主義が「宗教」の公共的役割を批判的にとらえるのは理解し得るが、科学的合理主義が「宗教的なるもの」に優越するという主張は限界があるとし、普遍的真理との関係において幸福を探究する自由が確保されることが重要であり、「宗教的なるもの」の可能性を論じることは「世俗／宗教」の二分法を問い直すことにつながると主張する。

本書の特徴と意義は、主に人類学や社会学が担ってきたダリト運動研究に仏教学や宗教学などの研究者も参画した学際性にある。アンベードカルとその信奉者の「新仏教」を経典の理解不足・逸脱と切り捨てず、歴史や政治社会的文脈の中で評価しようとする姿勢は高く評価されよう。それだけに、各章の相互言及や共通テーマとの関連説明が必ずしも充分でないことが惜しまれる。例えばダリト運動の実態を扱うシャー論文と舟橋論文は、相互比較があれば、ダリトをめぐる社会的諸条件が生み出す運動実態の相違がより鮮明になったであろう。ダルマの記録を人々が合意した規範的慣例の蓄積とするオリヴェル論文の結論はダリト運動を考察する際にいかなる意味を持つのか説明が欲しい。ヴェルナー論文も同様に、ダルマの多元的意味が植民地期の翻訳によって失われたことがヒンドゥー社会とダリトにもたらした影響に言及して初めて実質的意義を持つのではなかろうか。なお、固有名詞の表記法や注の形式等で疑問を生じさせる箇所があるが、本書の意義を損なうものではない。この学際的プロジェクトが継続され、更なる成果が公開されるのを期待したい。

根本達氏の著作は、2001～16年にナーグプル市の元不可触民仏教徒を対象に実施したフィールド調査の集大成である。序章「研究の視座：同一性の政治学と生活世界における寛容」は、グローバリゼーションが急激に進むインドで明確な差異が失われ、アイデンティティ・クライシスに陥った人々が不安を解消するため新たに明確な差異を創造する「同一性の政治学」に依存し、他者への暴力を誘発していると指摘する。同一性の政治学を選択した集団を研究対象にする場合、その集団が埋め込まれた歴史的社会的文脈を検討する必要があるとし、元不可触民仏教徒の同一性の政治学の論理を分析対象としつつ、それとは異なる生活世界の寛容の論理に着目することによって、同一性の政治学の中から別の運動が生み出されていく様相を考察する、と表明する。

第一章「フィールドワークについて」は、調査対象地域であるナーグプル市の概要に続いて、著者が仏教徒組織、仏教寺院、仏教徒居住区でそれぞれ生活し行動を共にしつつ聞き取りを行うという調査方法を紹介する。第二章「歴史的背景：一九五六年以前と一九五七年以降」は、ナーグプル市の仏教徒による反差別運動の歴史的背景を3つのレベル（国家政策、指導者・活動家、仏教徒の日常的実践）に分けて整理する。第三章「反差別の取り組みと自己尊厳の獲得」は、マハールがアンベードカライトになる過程を彼ら彼女らの語りから考察する。アンベードカルの思想が縮約されて仏教布教に使用され、彼の著作や演説と仏教徒の間に流布する要約版の教えの間にずれが生じていると指摘される。第四章「仏教儀礼とカテゴリー化を逃れる意味の創出」は、在家仏教徒の多くが行う守護紐儀礼には3種の意味づけがなされていると分析する。第一は守護紐をブッダの力が宿るものと意味づける。超自然的な力への信仰という既存の枠組みを読み換えるもので在家信者の多くに共有される。しかし現在ナーグプルの仏教運動で正統とされる第二の意味づけでは迷信とされ、守護紐を切り落とす活動も行われている。一方で、ブッダや五戒を想起させるものとして守護紐の意味を作り直す第三の試みもある。これを著者は、カテゴリー化を逃れ得る意味の創出と評価する。第五章「超自然的な力と対面関係の網の目の構築」は、「半仏教徒・半ヒンドゥー教徒」が改宗後もヒンドゥー教儀礼を続ける動機は厳しい生活環境の中で家族や親しい者に安全や豊かさをもたらしたいという愛情にあり、聖紐儀礼を通じて対面関係の網の目が形成されていると分析する。

第六章「『団結か、愛情か』という二者択一の問い」は、アンベードカライトが「半仏教徒・半ヒンドゥー教徒」の家からヒンドゥー教の神々の像を回収焼却する行為、「改宗キリスト教徒」を仏教に再改宗させる取り組み、聖紐を切り取る活動と、それへの反応を考察する。紐切り活動は、排他的仏教徒共同体の団結か家族の愛情かの二者択一を迫る。更には「平等と科学の仏教」以外の宗教を迷信とし、貧困や病気に苦しみ超自然的な力やキリスト教組織の援助に依存せずにはいられない人々を「被差別者の中の被差別者」に追いやっていると指摘する。第七章「『過激派』のアイデンティティ・クライシス」は、アンベードカルの教えを絶対視する活動家自身も仏教徒共同体の強化という理想と家族の愛情との板挟みで葛藤している現実を明らかにする。これを著者は同一性の政治学にのみ依拠する仏教徒運動の一つの限界であると指摘する。第八章「『半仏教徒・半ヒンドゥー教徒』の戦術的な試み」は、いずれの宗教にも属さない神や儀礼を創出して対面関係の網の目を維持しようとする「半仏教徒・半ヒンドゥー教徒」の試みを、脱カテゴリー的な戦略と位置づける。また彼らが仏教徒への差別と闘う抗議デモに「仲間を助けるための喧嘩」と理由づけて参加する実態を、排他的仏教徒共同体に愛情を媒介とする対面関係の網の目を接続する試みと解釈する。第九章「佐々井秀嶺による矛盾する実践」は、仏教僧佐々井の宗教実践と活動を活動家や在家信者の視点と併せて分析する。佐々井は、超自然的な力を迷信とするアンベードカルの思想を認識しつつもそれを求める人々には守護紐や祝福を付与し要求に応える。また反差別運動を指導することにより「不可触民の指導者」としてアンベードカライトから「半仏教徒・半ヒンドゥー教徒」までを接続する役目を果たしているという。終章「隠蔽される声、等質性なき連帯、生成変化の政治学」は本論の主張を整理し、アンベードカルの教えに従う仏教徒の同一性の政治学が内部の他者の声を隠蔽している問題性を指摘したうえで、生活世界では既存の要素をブリコラージュして排他的共同体と「開かれた親族」関係を繋ぎ別の形の連帯を創出していること、佐々井が隠蔽された他者の声に応え「不可触民の聖者」に生成変化していることに可能性を見出している。

本書の特徴は、筆者が仏教徒運動の指導者、活動家、在家信者と親密な関係を結び、各レベルにおける彼ら彼女らの活動、日常的実践、葛藤を活写している点にある。数多くのインフォーマントの心情の吐露は、

各レベルで信頼を勝ち得た著者だからこそ引き出せたものであろう。各レベルの内側に身を置いてきた著者の情愛に満ちた、かつ冷静で客観的な洞察により、我々は現代インドで展開される仏教徒運動の複層性、矛盾、可能性を把握することができる。しかし本書の価値を不動のものとするこの特徴が問題を生じさせている感も否めない。著者が元不可触民仏教徒と「同一化」しているために、何らかの形で仏教と接点がある人々（「半仏教徒・半ヒンドゥー教徒」や「改宗キリスト教徒」を含む）のみが分析対象となり、それ以外の人々は本書には現れない。その結果、元不可触民が「平等と科学の仏教」徒になり自己尊厳を獲得したとしても、それを社会がどう認識し何が変わったのか／変わらないのか不明である。分析される「仏教運動」も宣教活動か各種儀礼にほぼ限定され、反差別、不可触民解放に関わる具体的活動とその効果は捨象されている。仏教運動は反差別運動の一形態であって、仏教運動ではない不可触民解放運動も存在するはずである。アンベードカルの人生と思想に共感しつつも仏教改宗・宣教以外の形で反差別運動を推進する人々と仏教徒との関係はいかなるものか。根本氏の今後の研究で分析されることを大いに期待したい。

しが みわこ　●専修大学文学部